

普通体を基調とした自然談話に現れる丁寧体について —不満を表明する際のアップシフトに着目して—

高宮 優実

要 旨

これまでのスピーチスタイルシフトに関する研究は、丁寧体基調の会話に使われる普通体を分析したものが多かったが、本稿では普通体基調の会話に現れる丁寧体に焦点を当てる。同年代の友人同士や家族間といった親しい間柄で話される日常談話を分析した結果、不平、非難、批判、反論、不同意といった不満を表明する際に、丁寧体が使われ、それには次のような3つの機能があることが示された。1) 丁寧体で不満表明を繰り返すことにより、意味が強調され、相手を説得したり、理解させたりする効果がある。2) 普通体基調の会話に現れる丁寧体には、相手に譲歩させたり、相手をなだめたりする効果がある。3) 第三者について否定的なコメントをする際に、丁寧体を選択することによって、聞き手からの賛同を得る。このような機能は日本語での円滑なコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。

キーワード：スピーチスタイルシフト、アップシフト、丁寧体、不満表明、自然談話

1. はじめに

日本語の会話は、相手との親疎の関係や、距離、場面などに応じて、丁寧体と普通体という2つのスピーチスタイルが、意識的、無意識的に臨機応変に使い分けながら進められるという特徴がある。その適切な使い分けは、社会において良好な人間関係を築いていく上で重要である。本稿では、同年代の友人同士や家族間といった親しい間柄の人の間で行われた普通体を基調とした自然談話を観察し、相手を非難する、批判する、相手に対して不平、苦情を述べるといった不満表明や不同意の表明の際に、丁寧体が使われるという特徴に焦点を当てて分析する。そして、相手との良好な人間関係を保ちつつ不満を表すというコミュニケーション上のストラテジーについて考察する。

2. 先行研究

親しい同年代の友人同士や親子・兄弟といった家族間の会話では、普通体が基調として用いられることが多い。しかし、普通体基調の会話においても、一時的に丁寧体が使用される（以下、アップシフト）という現象が見られる。

スピーチスタイルに関する研究はこれまでも多く行われているが、そのシフトは主に丁寧体を基調とした会話にどのようなときに普通体が現れる（以下、ダウンシフト）かが中心であった（生田・井出1983、宇佐美1995、岡崎2015、陳2003、ナズキアン2007、福富2009、三牧2000、2002、メイナード1991、Ikuta 2008、Makino 2002、Maynard 1991、Megumi 2002、Okamoto 1999）。これらの研究により、ダウンシフトには、丁寧さを保持したまま、堅苦しさを緩和し、心的距離を縮めたり、会話を円滑に進める機能があることが明らかになっている。

しかし、ダウンシフトの研究に比べると、アップシフトに焦点を当てた研究は未だ少ない。劉（2013）は、アップシフトは、常套句・会話終了時の合図、相手への非難、対立する立場や意見を提示する際に観察されることを明らかにした。さらに、力関係が同等の者同士の初対面での会話を分析した嶋原（2014）は、対人的条件下のアップシフトは「相手の丁寧体に同調するとき」「FTA（Face Threatening Acts, Brown & Levinson 1987）を補償するとき」「語彙の丁寧度の低さを補償するとき」「冗談を言うとき」に心的距離の伸縮を目的として使用され、談話的条件下のアップシフトは「ユニットを移行するとき」「意見・結論を明示するとき」に談話の展開を明確にするために使われていることを論じている。また、千々岩（2016）は、アップシフトは、相手の反応を用心深く引き出す技法であると述べている。一方、Cook（2008a、2008b）は、シフトを「指標（index）」として捉え、普通体基調の会話に現れる丁寧体とは「姿勢を正す（self-presentational stance）」ことを指標し、それがウチの文脈で用いられる場合には、指導的立場であったり、責任者であったりといった、一時的に現れる様々なアイデンティティを指標する役割を持つと述べている。さらに、会話の中に現れる否定的評価を分析した高宮（2016）は、アップシフトには、相手との関係を壊さずに目下が目上

に対して指導的立場をとったり、理不尽な命令や非難を冗談としての対立行動だと相手に伝えたりする機能があることを明らかにしている。

相手に指示をしたり、非難したり、不満を表す行為は、相手の立場を脅かし、人間関係を傷つける恐れがあるため、注意を払って行う必要がある。不満表明に関するこれまでの研究には、ウォンサミン (2016)、崔 (2009)、初鹿野・熊取谷・藤森 (1996)、藤森 (1997)、牧原 (2008)、李 (2004、2006) などがあり、聞き手に間接的に不満に気づかせるために、不都合な状況が起きることを暗示するなど、様々なストラテジーは明らかにされているものの、いずれもスピーチスタイルシフトとの関係性には特に焦点が当てられていない。アップシフトによって相手との衝突を回避できるのであれば、それはコミュニケーションにおいて非常に重要なストラテジーとなる可能性がある。そのため、本稿では、幅広い人間関係や状況下での不満表明場面とアップシフトの関係を考察することにする。

3. 研究目的と方法

3.1 アップシフトの定義

日本語には、丁寧体（です・ます体、敬体）と普通体（だ体、常体）の2つのスピーチスタイルがあるが、丁寧体から普通体へのシフトはダウンシフトと呼ばれ、普通体から丁寧体へのシフトはアップシフトと呼ばれている。本稿では、千々岩 (2016:115) を参考に、アップシフトとは「普通体を使用している話者が丁寧体を一時的に使用する現象」とであると定義する。

3.2 不満表明の定義

本稿では、行動期待や文化規範に反するような状況を好ましくないと感じることを「不満」と定義し、李 (2004、2006)、ウォンサンミン (2016) を参考に、「不満表明」とは、好ましくない状況に対する反応、その状況の改善を求める目的を持つ言語行動であり、非難、批判、不平、反論等も不満を表すものと定義する。

3.3 研究の課題

本稿の具体的な研究の課題は以下のとおりである。

『不満表明の場面において、アップシフトがコミュニケーション上のストラテジーとして用いられているかを明らかにする。』

3.4 研究方法

『談話資料 日常生活のことば』(2016) 及び『Sakura Corpus』(2009) に収録されている会話データを分析の対象とした。『談話資料 日常生活のことば』には、20代から70代までの広い年代層の男女が日常生活の雑談を中心として行った自然談話が収録されている。『Sakura Corpus』には、19歳から21歳までの大学生男女が、4人ずつのグループとなり、雑談を行っている自然談話が収録されている。これら2種類のデータの中で、3.2で定義した不満表明が含まれる場面を抽出し、どのような状況下で発話されたかの詳細と、使用されたストラテジーを、会話分析の手法を用いて検証した。

4. 結果と考察

4.1 相手に対する直接的な発話

ここではまず、不満や非難が相手に対して直接向けられている発話について観察する。

ストラテジー1：丁寧体で不満表明を繰り返すと意味が強調されるため、相手を説得したり、理解させたりする効果がある

会話1は、50代の母親が、10代の娘1（長女）と娘2（次女）と3人で自宅で雑談している場面での、特に母と娘1との間の会話である。家族全員で行く韓国旅行の計画が話題となっており、韓国でどのような格好をするべきかについて話している。娘が、自分はもう子どもっぽく見えないので、大人っぽい格好で旅行したいと提案するが、母親が、それまでの普通体から丁寧体に切り替え、同じ表現を繰り返し、反論する。

【会話1】

- 1 母：韓国なんかさ、全然1人でも平気だよ。
2 娘：だよね。
3 母：うん、でもね、治安悪いってよ。
4 母：襲われて、もう帰って来れないかもしれない。
5 娘：いや、それはないでしょ。
6 娘：だって韓国人に見えるでしょ、この顔。
7 母：だっ…、ハハハハ（笑い）。
8 娘：しかも、[娘の名の一部]ちゃんも、ある程度身長高いしさ、
9 もう子どもには見えないでしょ？
→10 母：見えます。
11 娘：見えないでしょ？
→12 母：見えます【声に抑揚をつけて】。
13 娘：ある程度の、こう格好をして行けば。
14 母：どういうかっこ？ある程度の格好【笑いを含んだ声】。
15 娘：ちょっと、何かね。
16 母：化粧して行くの？
17 母：＜沈黙＞まずくなーい？、それ、ちょっと。

この会話では、冒頭の1行目から8行目では母娘共に普通体でやりとりをしている。9行目で娘が「もう子どもには見えないでしょ」という質問をしたため、大人っぽい格好をさせてほしいという願望が含まれることを察知した母親が、10行目で「(子どもに) 見えます」と丁寧体で答えている。この発言に反論する意味で、娘は再度9行目と同じ質問を繰り返し、「見えないでしょ」と言っている。これは質問ではなく、明確に反論、不同意の役割を果たしている。そのため、母親は声に抑揚をつけて、12行目ではっきりと「見えます」と言い、子どもに見えるので、子どもらしい格好をしなくてはいけないということを暗に示している。ここでは、母親は「姿勢を正す (self-presentational stance)」指標 (Cook 2008a) として、丁寧体を選択しているこ

とが考えられる。つまり、それまで普通体で親子という関係を意識せず親しく旅行について話していたカジュアルなモードを変えて、母親としての役割を強く意識して、それを指標として表すために敢えてスタイルを丁寧体に変化させたということになる。即ち、きちんと子どもらしい服装、見た目にするよう、相手を説得しようとしているのである。その説得を受けて、13行目では、娘は「ある程度の、こう格好をして行けば」と、その程度が際立っているわけではないということを強調し、自分の年齢とひどく乖離した大人っぽい格好をしたいというわけではなく、ほんの少し、ある程度大人びた格好であれば許されるのではないかと妥協する姿勢を見せている。つまり、説得を理解し、それを受けて譲歩している点で、母親の説得は成功したと言える。その後の会話では、14行目で「ある程度の格好」というのはどういう格好なのだとさらなる詳しい説明を母親が要求し、間接的には、ほんの少しの程度であっても、大人っぽい格好は許さないということを示唆し、さらに、先手を打つように16-17行目で、「化粧して行くの？まずくなくない？」と語尾を延ばして、普通のくだけた話し方に戻して話している。14行目の「どういう格好？」という発話を笑いを含んだ声で言っていることから、母親は、大人っぽい格好はしてほしくないという希望を、指示という形で命令するのではなく、本人からの理解を得て説得したいということで、茶化しながら言っているのではないかと考えられる。

次に、会話2では、21歳の4人の大学生（女性2人、男性2人）がアルバイトについての会話をしている。女子学生1が、自分がアルバイトをしている眼科について説明しており、どのような業務を任されるかについて話した後で、雇用主の業務命令の仕方を説明している。それについて聞いた女子学生2が、女子学生1が雇用主を「おじさん」と説明していることに驚き、「おばさん」をイメージしながら話を聞いていた、と驚きを表現している。「おばさん」だと思っていたと強く言うので、女子学生1は、それに反論して、「おじさん」だということを繰り返し説明している。

【会話2】

- 1 学生1：そうそう、30いくつのおじさん。ははは（笑い）。
- 2 学生2：男なの？
- 3 学生1：男だよ。
- 4 学生2：男なの？
- 5 学生1：男だよ。
- 6 学生2：おばさんかと思ってた。
- 7 学生1：男です。

この会話では、女子学生2人とも、普通体を使って親しくアルバイトの様子について話をしてしたが、雇用主について描写をするところで、女子学生1が「おじさん」と形容したことに驚き、女子学生2が「男なの？」と質問している。これに対して、最初は女子学生1は、普通体で「男だよ」と答える。それに対して、女子学生2は、答えが聞こえていたにもかかわらず、2行目と全く同じ質問を4行目で再度し、「男なの？」と聞いている。これは、答えの内容に驚いたため、本当に男性なのかを確認し、強調するために2度聞いたのだと考えられる。女子学生1の答えも3行目と全く変化がなく、「男だよ」と普通体で返している。それに対して女子学生2は、「おばさんかと思ってた」と自分のイメージしていたことが間違っていたことを表明する。すると、女子学生1は7行目で丁寧体に切り替えて、「男です」と説明している。ここで「男だ」ということを説明するのは、冒頭の「おじさん」も男であることを含めると、既に4度目ということになる。相手のイメージ、考えを否定するのに、最終的にアップシフトさせて丁寧体で「男です」と発言した背景には、Cook (2008a) の指導的立場、知識のある者としての立場を指標していることが考えられる。同時に、ここで、性別についての問答は終わらせ、次のトピックに移行すべきだという、一連の会話の終わりを表しているのではないと思われる。このように、この会話では、丁寧体にシフトすることによって、相手が自分の認識が間違っていたことを認めた、認識を覆したという部分に同調し、改めて丁寧体を使って説得しているというこ

とが言える。

次に会話3は、4人の19歳の女子大学生が中学時代、高校時代の教員についての思い出話をしている場面である。それぞれ違う中学、高校に通っていたが、学生1が自分の中学時代の担任教師はとてもよかったと言うのに対して、他の学生は3人とも、中学時代にも教員にもよい思い出がないと話し、否定している。

【会話3】

- 1 学生1：よかった、中学の担任。
- 2 学生2：へー。
- 3 学生3：別に中学に思い出一切ないんやけど。全然ないんやけど。
- 4 めんどくさい先生やった。
- 5 学生1：ああ、そう。ない？
- 6 学生2：ない。
- 7 学生4：いい先生なんて出会ったことないもん。
- 8 学生1：ふーん。あー、固いね。
- 9 学生3：なんか、冗談通じないの。まっすぐ過ぎて。
- 10 そんな学校でしたから。
- 11 モデル校ですから。モデル校ですから。
- 12 めんどくさい先生だったよ。
- 13 学生2：小学校？
- 14 学生3：んー、あ、きちんとしたね、うーん。

学生1は冒頭で普通体で自分の中学時代の教員がとてもよかったと肯定的な感想を述べるが、他の学生たちが全員否定的な感想しか持っていなかったため、それに共感する姿勢を示し、普通体で8行目に「(教員は) 固いね」と相手の意図を汲んで、教員を批判している。それに同調し、学生3は9行目で普通体で「なんか、(教師に) 冗談通じないの。(教員が) まっすぐ過ぎて」と普通体で不平を述べた直後に、10行目で「そんな学校でしたから」と

丁寧体にアップシフトさせて、固い教員しかいないつまらない学校だったことへの不満を述べている。さらに11行目では「モデル校ですから。モデル校ですから」と、自分の中学校はモデル校であったため、固い校風でも仕方がないと、理由を丁寧体で繰り返し述べている。ここでの繰り返しには、強調（黒川2006）の意味が含まれていると考えられる。その直後には普通体に戻って、「めんどくさい先生だったよ」と更なる不満を述べている。14行目では、めんどくさいという言葉の意図は、「きちんとしていた、またはきちんとし過ぎていて冗談が通じない教員ばかりだった」ということであると説明をしている。このように、この会話では、丁寧体へのシフトによって、モデル校だったので、冗談の通じない固い教員ばかりだったとしても仕方がないということで、相手に理解を求めることに成功していることが言える。

ストラテジー 2：普通体基調の会話に現れる丁寧体には、相手に譲歩させたり、相手をなだめたりする効果がある

会話 4 は会話 1 の韓国旅行についての話の直後で、母と10代の娘 2 人が父親の誕生日に外出することについて話している場面である。韓国料理が食べたいと娘 1（長女）が言うと、母親が父親がもう飽きたと言っていたと反対したため、娘 1 が機嫌を損ね、丁寧体にアップシフトし、突き放すような口ぶりで不平を述べている。

【会話 4】

- 1 娘 1：外出するのに、なんかね、日本料理もいいけどさ、「どうせなら外国料理でしょう」【笑いながら】とか思ったの。
- 2
- 3 フフハハ（笑い）。
- 4 母：外出するから、外国料理？
- 5 娘 1：うん、まあね。
- 6 なんか、日本のだったら、家で食べられんじゃん。
- 7 だから、もうね、韓国、韓国料理とか。

8 娘2：超外国料理一。

9 母：でも、もう韓国、韓国料理飽きたって、お父さん言ってたよ。

→10 娘1：あ、そうですか【突き放すような口ぶりで】。

→11 ン、いいですよ、別に。＜笑い(母)＞

12 ジャあ、あたし1人だけ入るから、そこのお店に。

→13 娘2：はいはい、分かりましたよ。

14 母：何なのよ、あんたはさ。どこまでもさ、ひねくれてるよね。

15 ジャあ、いいよ。別に韓国料理でもいいけどー、その一、

16 どこにするかねえ、何か結構いっぱいだって言うから。

ここで、それまで普通体で応答していた娘1が突然10行目で「そうですか」と丁寧体を使っているのは、7行目での、せっかく外食するなら日本料理ではなく韓国料理が食べたいという自分の提案が、9行目で父親が飽きていることを理由に母親に反対され、がっかりした気持ちや反論を明確にするためだと考えられる。その後も11行目で「いいですよ、別に」と丁寧体を倒置で言い、12行目で、「1人だけ入るから、そこ(韓国料理)のお店に」と普通体に戻って言っている。10代であることや親子揃っての外食であることを考えると、娘1人だけが韓国料理の店に入るというのは現実的ではなく、そういった非現実的なことをすねて言っているのは明白である。機嫌を損ねてしまったため、母親が取り繕うように11行目で笑っている。Warner-Garcia (2014) は、不同意など会話において好ましくない状況が起きているときに起こる笑いは、好ましい状況へとフレームを変える役割を果たすとしているが、ここでの母親の笑いは、娘の反論を真に受けずに、笑いでごまかそうとしている意図があるように考えられる。ここまでの会話を聞いて、次女である娘2が諭すように13行目で「はいはい、分かりましたよ」と丁寧体で口を挟んでいる。これは、娘1が1人で韓国料理店に行くなどということは、できないに違いないということからの反論である。丁寧体の「はい」を二度繰り返す「はいはい」は、「仕方がない」という意味合いでの「はい」であり、決して肯定・賛成の意味での「はい」ではない。従って、「わかりました」

という丁寧体での応答も、「分かったから、韓国料理店に1人で行ってもいい」という許可ではなく、そこまでどうしても行きたいのだという娘1の気持ちは理解したという意味である。つまり、ここでの娘2の丁寧体は、娘1をなだめることを意図して、反論の意志を伝えやすくしていると考えられる。その後母親は14行目で、普通体で「ひねくれてるよね」と非難し、15行目で、「じゃあ、いいよ」と許可を与え、「別に韓国料理でもいい」と譲歩している。このように、娘1が自分の提案が受け入れられなかったことに対して丁寧体で不満を表明したことがきっかけで、娘2、母親からの譲歩を引き出すことに成功したことがわかる。

次の会話5は4人の21歳の女子大学生が、アイドルグループについて話している場面である。

【会話5】

- 1 学生1：二宮（芸能人）好きだよ。
- 2 分かるよ、彼のよさは。
- 3 学生2：嵐（アイドルグループ）の中だったら一番いいと思うよ。
- 4 まし。
- 5 学生3：そうだよなー、こないだ。
- 6 X（学生3の名前）にはその意味はわかりません。
- 7 わからない発言された。
- 8 学生1：ふふ（笑い）、ましとか言われた。
- 9 学生4：ちょっと。

この会話では、「嵐」のメンバー1名について好意的な感想を述べた学生1に同意して、「嵐の中では一番まし」という言い方で学生2は褒めている。学生3は学生1を受けて、最初は、メンバーについて補足説明をし始めていたが、「まし」という学生2の表現に反論するために、丁寧体で、「その意味はわかりません」と述べている。これは、一時的に丁寧体を使うことによって、相手に注意を促し、その部分は納得できない、賛成できないというこ

とを述べ、相手に対して意見を変えさせる、譲歩させる意図があると考えられる。

次の会話は、4人の19歳の女子学生が、動物が苦手な芸能人の話をしている、動物が嫌だという気持ちはよくわかると1人の学生が述べ、他の学生たちもそれに同意し、お化け屋敷よりも動物と触れ合う施設のほうが苦手だという意見が出る。その後、動物と触れ合うことを目的としたテーマパークとお化け屋敷、どちらがまだ耐えられるかという質問をしている場面である。そこで、丁寧体へのアップシフトが見られる。

【会話6】

- 1 学生1：ワンワン動物園に入るのが良いか、お化け屋敷に入るのが
- 2 良いか。
- 3 学生2：お化け屋敷で待ってます、外で。
- 4 学生3：ふっ、あっはっ（笑い）。
- 5 学生2：ふっ（笑い）。
- 6 学生1：フジキ（テーマパーク）のお化け屋敷1人で入るんだよ？
- 7 学生2：嫌。
- 8 絶対入りませんけど。
- 9 学生3：いやあー、無理無理無理。

学生1が動物園とお化け屋敷、どちらも嫌だがどちらかを選ぶとするとどちらがいいかという質問を投げかけると、それまでは普通体でのみ話していた学生2がお化け屋敷を選択するが、中に入るのではなく、「お化け屋敷で待ってます、外で」と丁寧体で倒置して返答している。これにより、どちらも強制されて中に入るのは嫌なので、相手に譲歩させる案として、中に入らずに外で待つ、外で待つだけなら、動物園よりお化け屋敷のほうがましであるということを提案する。その少し後で、お化け屋敷を選択するのなら、外ではなく中に入らなければいけないということを6行目で学生1に再度強制されたため、それに反論するために、8行目で丁寧体で「絶対入りません

けど」と伝えている。これによって自分の主張の深刻さ、不満の強さを伝えていていると考えられる。

以上のように、相手に対する直接的な発話を分析した結果、普通体基調の会話の中で、丁寧体で不満表明を繰り返すと、意味が強調され、相手を説得したり、理解させたりする効果があること、また、普通体基調の会話で丁寧体を使うことで、相手に譲歩させたり、相手をなだめたりする効果があることがわかった。次に、第三者に対する間接的な発話を検証する。

4.2 第三者に関する間接的な発話

ここでは、その場にはいない第三者との間で行われた会話について説明する、第三者に対する不満や反論を述べるなど、間接的な状況について考察する。

ストラテジー3：第三者について否定的なコメントをする際に、丁寧体を選択することによって、聞き手からの賛同を得る

次の会話は、21歳の男子学生4人がペットについて話をしている場面である。学生1が飼っているペットの犬は、自分よりもカットにお金がかかり、オスなのにリボンをつけておしゃれをして帰ってくることに對して、丁寧体でそこにはいないお店の人への批判・非難として、不平を述べている。

【会話7】

- 1 学生1：俺より、俺より金かかっと思うで、カットに。
- 2 オスなのにリボンつけて帰ってくるでね。
- 3 全員 ：(笑い)
- 4 学生1：ちょっと意味わからんもん。
- 5 なんでリボンつけとんだー？
- 6 学生2：かわいいじゃん。
- 7 学生1：かわいいよ。
- 8 かわいいけどさ、オスですけど…って思っちゃうみたいな。
- 9 コーギーはかわいいもんだ。

この会話では、自分の飼い犬がカットに行くたびに、リボンをつけて帰ってくることについて、4-5行目でどうしてリボンをつけられているのかわからないと疑問を述べると、学生2に「かわいいじゃん」と反論される。学生2の「かわいい」には同意し、「かわいいよ」と7行目で一度同意するものの、そこにはいない店員への非難として、8行目で「かわいいけどさ、オスですけど…って思っちゃうみたいな」と丁寧体にアップシフトさせて不平を述べている。これは、聞き手の学生2に対して自分の不平を述べる状況のために丁寧体を選択しているということが考えられると同時に、もう一方では、自分の心内の店員に対することばを引用している状況であるとも捉えられ、仮に店員に向かって話しているとしたら丁寧体になるために、丁寧体を選択しているとも考えられる。ここでは、「みたいな」という緩和表現も文末に加えることで、相手からの賛同を取り付けやすくしていると考えられる。

次の会話は4人の21歳の男子学生が、塾講師のアルバイトについて、その時給等待遇について話をしている場面である。そこにはいない、塾に来ている生徒の親に対して、大学名で時給を決めるという「ブランド志向」であることに不満を丁寧体で述べている。

【会話8】

- 1 学生M：けどだって1日3時間とかだと3千円くらいしか
- 2 稼げないわけでしょ。
- 3 学生I：うん。1日4千円くらいだったかな。
- 4 3コマやって。
- 5 学生M：少ない。
- 6 学生I：受験生になると、ちょっと上がってくる。
- 7 学生L：受験生なんてプレッシャーやん。
- 8 学生I：うーん。
- 9 学生H：A（大学名）だからね。
- 10 学生I：なにそれ。
- 11 学生H：A（大学名）だけ時給がさ。

- 12 学生I：あー。
13 学生H：B（大学名）だと2千円。
14 学生G：そこまでないだろ。
15 学生H：わからんよ。
→16 学生L：まあ親はブランド志向ですよ。
17 学生I：うん。

この会話では、塾講師の時給の低さに不満を述べていた学生同士が、所属する大学が有名大学だと値段が上がることについて、「親はブランド志向」だから、親の意向によって給料が変わるのだと、その場にはいない塾の生徒の親への不満を述べている。時給を決めるのは塾の雇用主だが、その背後にある、親の大学をブランドとして扱う態度が問題だということを丁寧体で説明している。

会話9は、20代の女性の友人同士の雑談である。Aの交際相手について話している。Aは交際相手と喧嘩することを勧める同年代のBに対して、喧嘩をすると相手にののしられるからしたくないという不満、反論を丁寧体で述べている。

【会話9】

- 1 B：喧嘩しまくるっていうか、あの一何、その一、気持ちいい、
2 お互いが気持ちいい状況にあえて持っていかない、みたいな。
3 A：＜沈黙6秒＞でもそうすると、すごいあたしが性格悪いみたい
→4 な感じでののしられるんですけど…。
5 B：だから、ののしるのよくないよ、みたいな、フフ（笑い）。
6 それだめよって、アッハッハハ（笑い）。

この会話のこの部分以外ではAは普通体を使っているものの、ここでBから、Aの彼は甘えているので、甘やかさない方向で喧嘩をしたらどうかというアドバイスを受けた際に、相手への反論として4行目で「ののしられる

んですけど」と丁寧体を使っている。これは、丁寧体で緩和しながらも、相手の助言は実行できないという反論になっている。

会話10は会話9の直後、引き続きAの交際相手について話している状況である。自分の交際相手が電話にすら出ないのだという不満を、丁寧体で述べている。

【会話10】

- 1 A：メールでってことでしょう。
- 2 B：うん、メールでも電話でも。
- 3 A：いや、電話出ないから。
- 4 B：なんで電話出ないの。
- 5 A：それなんですよ。
- 6 それは、もう知らない。
- 7 だ、そこがまず、もっともっとイラっとするわけ。

この会話では、自分の交際相手が電話にすら出ないのだという不満を、丁寧体で「それなんですよ」と述べている。「それなんだよね」と普通体で返すよりも、相手に事態の深刻さを理解させつつ、それにはもう触れたくない、これ以上情報を出したくないということで、その直後には「もう知らない」と普通体に戻っていると考えられる。

5. おわりに

本稿での分析の結果、日常生活における普通体を基調とした会話で一時的に使われる丁寧体には、次のようなストラテジーが見られることが明らかになった。まず、1つめのストラテジーとして、普通体基調の会話に、丁寧体を2度繰り返して不満を表明することで、相手を説得したり、相手からの理解を得るといった効果があることがわかった。2つめのストラテジーとして、普通体基調の会話に丁寧体を混用することによって、交渉場面では、相手からの情報を得たり、否定的な考えを持つ相手をなだめる効果があることがわ

かった。最後に、3つ目のストラテジーとして、その場にいない第三者について否定的なコメントをするときに、丁寧体を使うことで、自分の意見に聞き手から賛同を得ようとしていることがわかった。

研究課題の「不満表明の場面において、アップシフトがコミュニケーション上のストラテジーとして用いられているか」については、会話中、相手との間に対立が起きた際に、相手を説得する、納得させるための用法として丁寧体が使われ、緩和のストラテジーとなっていることがわかった。

相手に対して、または第三者に対して、非難する、不満を表明するといった行為は、相手や、話題に上っている第三者のフェイスを脅かす行為のため、通常は避けたり、婉曲に伝えるストラテジーがとられる (Trosborg 1995)。しかし、『談話資料 日常生活のことば』及び『Sakura Corpus』では、丁寧体を用いて様々な場面で相手に不満、不同意を表明することが明らかになった。そこでは、主に3つのストラテジーが観察され、特に人間関係を脅かしていないことが明らかになった。今後は、日本語母語話者だけでなく、母語話者と非母語話者、非母語話者同士の会話も検証し、より細かくスピーチスタイルシフトについて観察し、その人間関係への影響を検証することで、将来的には日本語教育にも役立てることができるだろう。

参考文献

- 生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『言語』12 (12) pp. 77-84
大修館書店
- ウォンサンミンスリーラット (2016) 「不満表明とそれに対する応答の研究：「情報提供一応答」の連鎖に注目して」『人間文化創成科学論叢』19 pp. 11-19 お茶の水女子大学
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用一スピーチレベルシフト生起の条件と機能一」『學苑』662 pp. 27-42 昭和女子大学近代文化研究所
- 岡崎渉 (2015) 「上級日本語学習者による普通体へのスタイルシフト一インフォーマルスタイルに着目して」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』64 pp. 147-156 広島大学大学院教育学研究科

- 黒川直子 (2016) 「日本語の談話における繰り返しについての考察」『ICU 日本語教育研究』 3 pp. 65-79
- 現代日本語研究会 遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編 (2016) 『談話資料 日常生活のことば』 ひつじ書房
- 崔東花 (2009) 「不満表明とそれに対する応答—中国語母語話者と日本語母語話者を比較して」村岡英裕編『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』 218 pp. 43-63 千葉大学大学院人文社会科学研究所
- 嶋原耕一 (2014) 「母語場面及び接触場面の同等初対面会話におけるアップシフトについて」『社会言語科学』 16 (2) pp. 66-74 社会言語科学会
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 (1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較」『日本語教育』 88 pp. 128-139 日本語教育学会
- 高宮優実 (2016) 「日常会話における否定的評価のストラテジー」『ことば』 37 pp. 33-53 現代日本語研究会
- 千々岩宏晃 (2016) 「スピーチスタイルアップシフトの会話分析を用いた研究：日本語の雑談における反応要求の技法」『日本語・日本文化研究』 26 pp. 115-126 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト：生起しやすい状況とその頻度をめぐって」『日本語科学』 14 pp. 7-28 国書刊行会
- ナズキアンフミコ (2007) 「インタビュー談話における常体の機能」南雅彦編『言語学と日本語教育』 5 pp. 141-155 くろしお出版
- 福富理恵 (2009) 「接触場面における母語話者と学習者のスピーチレベルの使い分け」『言語文化と日本語教育』 37 pp. 106-109 日本言語文化学会
- 藤森弘子 (1997) 「不満表明ストラテジーの日英比較—談話完成テスト法の調査結果をもとに—」『言語と文化の対話』 pp. 243-257 英宝社
- 牧原功 (2008) 「不満表明・改善要求における配慮行動」『群馬大学留学生センター論集』 7 pp. 51-60 群馬大学
- 三牧陽子 (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出

- 「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—『大阪大学
留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4 pp. 37-53 大阪大
学
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—
初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に」
『社会言語科学』5 (1) pp. 56-74 社会言語科学会
- メイナード泉子 (1991) 「文体の意味—ダ体と丁寧体の混用について」『言語』20 (2)
pp. 75-80 大修館書店
- 李善姫 (2004) 「韓国人日本語学習者の「不満表明」について」『日本語教育』123 pp.
27-36 日本語教育学会
- 李善姫 (2006) 「日韓の「不満表明」に関する一考察—日本人学生と韓国学生との比
較を通して」『社会言語科学』8 (2) pp. 53-64 社会言語科学会
- 劉雅静 (2013) 「友人同士3者間会話におけるスピーチレベルシフトについて—上下
関係のある親しい友人の会話データをもとに—」『言語学論叢 オンライン
版』6 (通巻32号) pp. 34-48 筑波大学一般・応用言語学研究室
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*.
Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Cook, H. M. (2008a) *Socializing Identities through Speech Style: Learners of Japanese as a
Foreign Language*. Bristol, England: Multilingual Matters.
- Cook, H. M. (2008b) Style Shifts in Japanese Academic Consultation. In J. Kimberly & T.
Ono (eds.), *Style Shifting in Japanese*. pp. 9-38. Amsterdam/Philadelphia: John
Benjamins.
- Ikuta, S. (2008) Speech Style Shift as an Interactional Discourse Strategy: The Use and Non-
use of desu/masu in Japanese Conversational Interviews. In J. Kimberly & T.
Ono (eds.), *Style Shifting in Japanese*. pp. 71-90. Amsterdam/Philadelphia: John
Benjamins.
- Makino, S. (2002) When Does Communication Turn Mentally Inward?: A Case Study of
Japanese Formal-to-informal Switching. In N. Akatsuka & S. Strauss (eds.),
Japanese/Korean Linguistics, 10, pp. 121-135. Stanford, CA: CSLI Publications.

- Maynard, S. K. (1991) Pragmatics of Discourse Modality: A Case of Da and Desu/masu Forms in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 15, pp. 551–582.
- Megumi, M. (2002) The Switching Between Desu/masu Form and Plain Form: From the Perspective of Turn Construction. In N. Akatsuka & S. Strauss (eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, 10, pp. 206–219. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Miyata, S., K. Banno, S. Konishi, A. Matsui, S. Matsumoto, R. Ooki, A. Takahashi, & K. Muraki (2009) *Japanese - Sakura Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. 1-59642-429-X.
- Okamoto, S. (1999) Situated Politeness: Manipulating Honorific and Non-honorific Expressions in Japanese Conversations. *Pragmatics*, 9, pp. 51–74.
- Trosborg, A. (1995) *Interlanguage Pragmatics: Requests, Complaints and Apologies*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Warner-Garcia, S. (2014) Laughing When Nothing's Funny: The Pragmatic Use of Coping Laughter in the Negotiation of Conversational Disagreement. *Pragmatics*, 24 (1), pp. 157–180.

(たかみや ゆみ：アラバマ大学バーミングハム校)

(2017.11.15 受理)